

むかし、あるところに、男と女がふたりで暮らしていました。ところが、あるとき、女がなくなり、男はひとりになってしまいました。

ある晩のこと、男の家に、美しい女がたずねて来て、

「おまえの女房にしておくれ」といいました。あんまり美しい女だったので、男は、女房にすることにしました。ところが、女房は、働く以上にご飯をたくさん食べました。

ある日のこと、男は、梁に上がって、女房のようすを見張っていました。すると、女房は、大きな鍋にご飯をいっぱいいたいて、髪の毛をじゃふつと分けると頭を割って、割れ目からご飯を一生懸命つめこみはじめました。

男は、梁から下りてきて、

「この化け物め。よくもおれをだましたな」といって、女房の首をぼろんともいでしまいました。

首は、男の首にびたつとくつきました。いくら離そうとしても離れません。男は、女房の首をくつつけたまま、旅に出ました。

歩いて行くうちに日が暮れたので、男は、宿をとることにしました。そこで、ある家の前で、

「今晚、ひと晩、泊めてくれないか」とたのみました。すると、家の人が、

「何人かね」とききました。男が、

「ひとりだ」と答えると、女房の首が、

「おらと合わせてふたりだ！」といいました。家の人は、

「ひとりならいいけれども、ふたりなら泊められない」とことわりました。

男は、何軒も何軒もたのんで歩きましたが、みな、ふたりなら泊められないというので、野山で寝ながら旅をつづけました。

やがて、五月の節句がやって来ました。男は女房の首に、

「今日は五月の節句だ。どこの家でも餅をたくさんつくから、ごちそうになろう。おまえは黙っているんだぞ」といいました。

男は、餅をついている家の前に立って、

「今晚ひと晩泊めてくれないか」といいました。

「何人かね。ひとりなら泊めるけど、ふたりなら泊められない」と、家の人がいうので、男は、

「ひとりだ」と答えました。女房の首は、黙っていました。

ようやく宿をとって、男は、餅をどっさりごちそうになりました。けれども、かくしてある女房の首には食べさせられません。夜になってふとんに入ると、女房の首が、

「なあ、なあ。おらも餅が食べたいなあ」とせがみました。男は、

「ここで黙って寝てる。台所たいどころに行つて、なべに残のこっている餅をみんな持もつてきて食べさせてやるから」といいました。すると、首は離れて、ふとんにもぐりこみました。

男は、部屋をぬけ出すと、走つて逃にげだしました。

やがて、女房の首が、気づいて、

「まてえ。どこまで行つてもひと口だあ！どこまで行つてもひと口だあ！」といつて、追おいかけて来ました。

男が、

「おれの後ろに、大きな川出る！」というと、男の後ろに大きな川ができました。ところが、女房の首は、

「どこまで行つてもひと口だあ！」といつて、川をこえて追いかけて来ました。

男が、

「おれの後ろに、大きな山出る！」というと、大きな山ができました。女房の首は、山をこえて追いかけて来ました。

「どこまで行つてもひと口だあ！」

男は、恐おそろしくて恐ろしくて、菖蒲しょうぶとよもぎの生えているところまで来ると、その中に飛とびこみました。女房の首は、気づかないで、走りぬけていきました。やつこのことで、男は助たすかりました。

だから、昔は、五月の節句には、まどに菖蒲とよもぎをさしたんだそうです。

どつとはらった

村上郁再話

資料『季刊民話第一号』民話と文学の会